

## ブレヒトのガリレイ像

— 教養について —

村 瀬 裕 也

〔附記〕本稿は演習科目「自然と認識」「社会と認識」合同シンポジウムの講演草稿である。

## I

今年度の演習科目では、近藤先生の担当する「自然と認識」と私の担当する「社会と認識」とを併せ、共同の授業形態を産み出す試みがなされていますが、この共同の紐帯ともいべき両者の共通の問題意識は、授業の中でも幾度かお話しした通り、「実在と認識」の関係ということにあります。すなわち、自然にせよ社会にせよ、一般に実在とか対象とかいわれるものを、既得の知識や各種のメディアによって与えられる情報に漬された主観の枠組みの中で理解し、あるいはそうした主観の投影を実在そのものの終局の姿と思ひこむような態度を初期のうちに拂拭すること、換言すれば主観と客観との「直接性の繫縛」を断ち切り、両者の間に正当な距離を確保し望ましい「間接性」を創造すること、つまり実在を私達にとっては決して直接的ならぬ客観として対象化するとともに、かかる実在と能動的に交渉を結ぶ主観の活動性を自己のうちに確立すること、——これがこの授業の課題です。要するに私たちの目標は、社会的実践主体たる人間の教養の初歩的な条件の獲得におかれているといつてよいでしょう。

そこで今日は、学生諸君の研究発表に混って、私からはひとつ教養性を発揮した話題を提供したいと思います。すなわち、「社会と認識」の演習では河上肇の生涯と学説を探究し、「自然と認識」の演習ではガリレイの『新科学対話』の輪読を進めてまいりましたが、今日は前者を担当する私が、ガリレイという後者の主題に些か容喙を試みようというわけです。と申しましても、ずぶの素人を以ってガリレイの自然科学上の業績の科学史的究明に挑むというような、もってのほかの暴挙に出ようとするのでは勿論ありません。私の企ては、ガリ

レイに題材を採った文学作品、すなわちブレヒトの周知の名作『ガリレイの生涯』(Leben des Galilei, 1938。なお1955年に決定稿完成)を通して、科学的認識と人間の・社会的「教養」——あるいは「教養」としての学問性——との関係の問題、結局は教養とは何か、いかにあるべきかという古くて新しい問題に穿鑿を加えようとするものにほかなりません。

## II

ベルトルト・ブレヒト (Bertolt Brecht, 1898~1956) は、誰もが知る通り、東ドイツの著名な詩人・劇作家・演劇理論家ですが、単にそれだけでなく、彼がその独異の作風と透徹した理論によって20世紀演劇史上に赫奕たる光芒を放つ巨星のひとつであることは、恐らく衆目の一致するところでしょう。しかもそこでは、私たちの今日的な課題を照し出す重要な主題が、一貫して、しかも多彩に追究され展開されています。世界各地で暴虐をほしいままにしたファシズム・軍国主義への抵抗、そして戦後における社会主義ドイツの文化建設への参画、——その波瀾に富む生涯のなかで倦むことなく創造され続けた彼の作品群は、理性とヒューマンイズムの陣営の輝やかしい知的記念碑としての特色を遺憾なく具備しているといえるでしょう。そこにはまた、私たちが追究しようとしている教養という問題性 (Problematik) との多くの接点が発見されます。この点に関してブレヒトが極めて意識的であったことは、彼が自分の作品をたびたび Lehrtheater, Lehrstück などと称し、その使命と資格要件を明確化していることから証佐を得ることができます。

ところで、教養の問題を論ずる場合、理性と感情という人間の内面的契機の問題を除外することはできません。そこでまずこれに関連したブレヒトの文章を見ることにしましょう。

「ところで、理性と感情との敵対は、彼等 (反動的な階級に属し、あるいは反動的な見解をもつ人びと——村瀬) の非理性的な頭脳の中にのみ、また彼等の頗る曖昧な感情生活によってのみ、存在する。彼等は偉大な時代の文学が反映する美しく力強い感情を、彼等自身の、まがいものの、汚濁した、発作的な、まことに理性の光を憚らざるを得ない感情と取り違えている。そして彼等は、

偉大な感情と対立している故に真実の理性ならざるものを、理性と称しているのである。終焉に瀕した資本主義の時代において、理性と感情とはともに頹落し、相互に悪しき非生産的な矛盾に陥ってしまった。これに対して、勃興しつつある新たな階級、およびその階級と共同で闘っている人びとは、偉大な生産的矛盾における理性と感情とに係り合いをもっているのだ。感情は理性の最大の奮励へと我々を衝迫し、理性は我々の感情を醇化精錬するのである。」(ここに訳出した一文は、1936年に執筆された „Vergnügungstheater oder Lehrtheater?“ なる論文の末尾に、1954年に付け加えられたものです。)

ブレヒトのこの含蓄に富む一文は、私たちの今日的な課題に対して重大な示唆を与えるものです。と申しますのも、最近、たとえばもと特高の法務大臣が臆面もなく日本国憲法に攻撃を加えたり、アメリカの圧力や財界の要請などのもとで、本格的な攻守同盟に向けての軍勢力増強への動きが活発化するなど、右翼的潮流とファシズムへの危険な傾斜がいよいよ無視できない状況となってきましたが、恰もそれとの呼応するように、一方では理性を排除する非合理主義の各種の形態が、他方ではヒューマンイズムの偉大な感情に媒介されない打算的な「現実主義」のさまざまな論調が、我國の論壇やジャーナリズムにおいて跋扈を擅にしております。こうした傾向が人びとをどこへ導くかは、過去の痛刻な歴史によってすでに検証済みのことです。

理性と感情との乖離、相互に他を排除することしか知らない「非生産的な」悪矛盾のもとでは、ひとは理性に与するにしても感情に与するにしても、自らの与する理性や感情それ自体を、自らの排斥する他方とともに虚偽と蒙昧と頹廢の泥坑に陥れるほかありません。そこでは人間らしい理性と感情、——理性に媒介された「美しく力強い」感情も、また感情によって昂揚された「真実の」理性も影をひそめ、野蠻と権謀だけが支配を逞しくするでしょう。理性と感情とは、もとより単純な一体性に融解するものではなく、相互に関係を結ぶものがすべてそうであるように、ある矛盾の関係にあります。しかしこの矛盾は、相方が自己の他者を排拒し無化することによって自己に固執する——しかしそのことによって自己自身の生命をも涸渇させ腐朽させる——ような関係でなく、両者の相互作用のなかからそれぞれの、そしてまた両者の相互関係そ

れ自体の、豊穡な発展が行なわれるような、まさに「生産的な」矛盾でなければなりません。

ある通俗的な見解、すなわち科学は専ら理性の領分に属し、芸術は専ら感情の領分に属する、というような見解は、なかなか執念深い感染力をもっているようです。ことに芸術の場合、科学や理性を排除したところに自己の特権的な牙城を確保しようとする傾向は、今日なお一定の勢力を保持しており、社会的危機とともにいつ暴威を振りだすかわかりません。こうした傾向に対してブレヒトは最も厳しい批判を向けたのです。彼の意を汲んでいえば、——声楽家は、恰も鳥が歌うように歌うのであってはなりませんし、また恰も鳥が歌っているかのような表象を聴衆に喚起するのであってはなりません。芸術は、恍惚を誘う麻醉として理性や意識を即自的な自然感情のうちに眠らせるのではなく、感情の昂揚とともに理性や意識を高貴な活動へと導くのでなければなりません。むしろ理性と感情との正常な相互関係（両者の間の「生産的矛盾」）の実現に助力を与えること、——ここに芸術の使命のひとつがあるといえるでしょう。理性と感情との媒介的・生産的統一、——それが教養ある精神の状態を示す指標であるとすれば、芸術はまさにそうした人間的教養を自己の射程に据えているのであり、ブレヒトはこの点に極めて自覚的な問題意識を抱いていたといえることができます。私たちはここにブレヒト芸術論の原点を確認し、話を次に進めましょう。

### III

ここで少しばかり迂回して、私たちが題材としている作品の主人公ガリレオ・ガリレイを組上に乗せることにしましょう。もとより私たちが問題にしようとしているのは、歴史的に実在したガリレイその人ではなく、ブレヒトによって描かれた芸術形象としてのガリレイにほかならないのですが、しかしそうは云っても、人類の歴史、ことに人類の自然科学的認識の発展史における彼の位置を一応見定めておくことは、この講演の主題からして決して無益ではないでしょう。

私たちはここで、ガリレイのなまの資料でなく、すでに加工された——認識

論的検討の加えられた——材料を取り上げたいと思います。すなわち、ここで確かめておきたいのは、今年の夏84歳で逝去したスイスの大心理学者ピアジェ (J. Piaget, 1896~1980) のいわゆる「発生的認識論」の観点から把握されたガリレイの認識史上の位置と性格にほかなりません (幻の書物といわれてきたピアジェの嚆舄たる大著『発生的認識論序説』は、最近、田辺振一郎氏らによって邦訳されつつありますが、以下の叙述はその第 II 巻「物理学思想」に拠るものです)。ブレヒトの作品を手懸りとして教養の問題に迫ろうというこのささやかな試みにピアジェの心理学まで動員するのは些か大風呂敷の印象を与えるかも知れませんが、しかし私は決して徒らに奇致を衒おうとしているのではなく、実はここからブレヒトのガリレイ像を理解するための重要な鍵を引き出そうとしているのです。そのことは追々明らかになるでしょう。

さて、ガリレイといえば、振子の原理や等加速度運動 (落下) の法則の発見、浮力天秤の発明や望遠鏡の改良、自ら改良した望遠鏡による天体観測とその諸成果など、科学技術史上重要な数々の発明発見が直ちに念頭に浮びますが、ここで焦点となるのは、コペルニクス理論を継承した——それによって彼自身をひとつの社会史的ドラマに引き入れた——かの宇宙体系に関する理論です。この理論をめじて、ガリレイは単に専門科学者としてだけでなく、それを大衆的に普及した偉大な啓蒙家としても歴史上不朽の位置を占めており、「科学の大衆化」(多衆を科学にまで組織すること——戸坂潤)、あるいは科学の教養化乃至ヒューマニゼーションという私たちの今日的課題に対しても、かけがえない模範を示しているのです。——この理論を発生的認識論の観点から検討すると、そこにどのような認識論的特色が見出されるのか、また人類の認識史上におけるどのような位置と意義が発見されるのか。

まず発生的認識論なる学問の要点についてお話ししなければなりません。ピアジェの叙述は頗る難解で、素人の私には理解の届かない点も少くありませんが、多少の誤謬を怖れず至極簡単に要約すれば、大体次のようなことになるでしょう。

一般に知識や認識には、主観の能動的な構成活動の所産・成果という面と、外的・客観的实在の模写・反映という面とがあります。物理学的認識において

一応この両側面を典型的に代表する——もっともこれは飽くまでも「一応」（話の単純化のために）ということであって、「厳密に」ということではありません——のは、公理的・演繹的な構築の系（論理-数学的な系=含意系）と、経験的・帰納的な描述の系（物理学的な系=因果系）であり、物理学的認識の結実には両者の協働が不可欠の要件となっています（物理学と数学との協力関係を最初に自覚的に肯定したのは、まさにガリレイその人でした）。ところで、この二つの系は相互にその原理と淵源を異にしていると考えられます（ピアジェ自身は、前者の淵源を主体の行動——主体自身の活動性——の配列に求めました）。ではこの二つの異質的なモメントがいかにして相互に協力し合い、ひとつの認識に実を結ぶのか。——このことの解釈をめぐる様々の哲学的見解の対立が生じます。すなわち、認識の形成における前者の優越性を認めることによって哲学上の先験説や構成説や形式主義が、後者の優越性を認めることによって哲学上の素朴模写説や経験主義や実証主義や現象主義が、また両者の間に諸種の折衷の形態が成立し、互に門戸を守り覇を競い合う状況が現出します。哲学的アプリオリの相違から発生するこのような分裂と対立の無政府状態から、私たちはどのようにして脱出すればよいのか、——恐らくピアジェは、ここに解決を見出すには、認識という人間の営みそのものを実証科学的な検討の対象として取扱うほかはない、と考えたのでしょう。そして彼が実証的研究の可能的な側面として着目したのが、認識の「発生」という事態、並びに低次の認識段階から高次の認識段階への「推移」という事態にほかなりません。ところで、この「発生」や「推移」は、二つの観点から検証可能です、すなわち、ひとつは古代から現代に至る人類の認識の発展史（認識の系統発生）——これは科学史の資料に基いて解明できます——という観点であり、他のひとつは、幼児から成人に至る個人の認識の成長（認識の個体発生）——これは心理学において実験的に追究できます——という観点です。かくて、この両者、すなわち認識の個体発生と系統発生との絡みから、認識の機構と構造の真相に迫ろうというのが、発生的認識論という学問分野の特別の課題になるわけです。

ところで、発生的分析に従えば、人間のどのような認識も、これを外的経験の直接の結果に帰することはできません。人間が外界から受けとる所与は、決

して外的実在の真相をそのまま伝えているのではなく、多かれ少なかれそれを受け取る主観の状態（内的条件）によって変形を蒙っております。しかし他方、認識の枠組みが予め先験的に完成していて、そこに経験的所与が組み込まれるところに認識が成立するという見解も、真実から遠く隔っているといわなければなりません。認識の枠組みは（経験的な）内容の組織化の過程においてのみ構築されるからです（時間や空間が決してアプリオリな直観形式でないこと、時間の観念は速度の介入によって始めて空間から分離することを、ピアジェは児童の実験的研究によって見事に証明しました）。

では真実はどのように理解されればよいのか。——ピアジェによれば次の通りです。人間の認識は、自己の活動性への対象の同化としてのみ成立します。従って、対象は自己の活動性の水準に見合った形でしか、すなわち同化の可能な範囲でしか、人間の認識の中に姿を現わすことはできません。そして主体がこれまでよりも一層客観的実在の真相に迫り、一層客観的な認識を達成するためには、ただひたすら経験知の蓄積を重ねていくだけでなく、これまで認識の水準を制約し、対象にその水準特有の変形と歪曲を与えていた主観の活動性の状態、その配列や構造などの主観の枠組みそのものを変更しなければなりません。

ここでピアジェは重要な観点を導入します。すなわち、一般に低い水準の主観の活動性は、より高い水準のそれに較べて「自己中心性」という性格をもち、それに伴ってその認識内容も「現象主義」と呼び得る特色を帯びる、ということです。「自己中心性」とは、自己中心的な視点から一方的に対象と交渉を結び、視点を変換したり視点相互間の関係を把えたりできない主観の状態を示す概念です。この状態にあっては、自己中心的に固執された視点に直接する対象の特定の側面のみが、不当に特権的な中心化を蒙り、それのもとに対象は歪曲された姿で現れるほかありません。自己中心的な主観にとって、世界はこの中心化された視点と側面の周りに現象するままのものであり、かかる主観は直接の所与としての現象——実在の見せかけの表面——を実在そのものの真相から区別することを知りません。「現象主義」とは認識のこのようなあり方を意味します。そこで、かかる「現象主義」を克服し、客観的実在の真相に一層接近する

ためには、換言すれば、一層高次の認識段階に進展するためには、これまで「現象主義」を齎していた主観の活動性の枠組み、すなわち「自己中心性」と自己中心的な固執から蟬脱し、自己にとって「見えるがまま」のものでない客観的实在の真相を把握するのに相応しい新たな枠組みを自己のうちに構築する必要があります。ピアジェはこの過程を「脱中心化」を呼びます。主観はこの「脱中心化」によって、「自己中心性」という意味での自己の「主観性」を克服し、一層客観的な立場にたちますが、しかしこれによって自己を対象的实在のうちに喪失するのではなく、むしろ対象的实在を自己との直接的関係から引離すことによって、自らは以前よりも一層大幅の活動性を獲得するのです。

以上のような前提にたつて、ガリレイの、また彼の先駆者であるコペルニクスの天体理論のもつ認識論上の意義と性格を考えてみましょう。御存知のように、彼らに対決しなければならなかったのは、中世的な位階秩序観と結びつけられ、教会権力によって絶対の権威を承認されていたプトレマイオスの宇宙体系、——かの地球中心の宇宙体系でした。その源流はギリシアの天文学、とくにアリストテレスのそれに求められます。ところでピアジェは、アリストテレス宇宙論の認識論的性格を次のように理解します。すなわち、アリストテレスにあっては、宇宙は、不動の核である大地を中心に、あらゆる事物がそれぞれの本性・運動に従ってその中心からの一定の距離に「固有の位置」を指定された有限の秩序界であると見なされ——より簡単にいえば、「宇宙は中心化され、諸存在はこの中心化に応じて位階づけられ」——ていますが、これは「目的論」や「実体的な力の観念」と結びついた、「前操作的な自己中心性の最後の到達点」に相応する、その段階特有の自己中心的思惟の所産にほかなりません。ここでは、大地の上にいる観測者は、宇宙空間のなかで中心的（絶対的）位置を占めており、この中心視点より観測される諸現象は彼にとって实在そのままの姿なので、彼の仕事は、自己の視点に対する直接の所与（現象）を確認し記録する以外に余地はありません（現象主義）。天道説の定立が以上のような思惟構造と不可分であったとすれば、コペルニクスやガリレイによる地動説の唱道が、彼等自身における知的活動性の抜本的な転換と相関的にのみ実現されたことは、当然予想されるところです。彼らは地球から宇宙の中心という特



権的な性格を剥離しました。そうすると、観測者の視点もまた特権的な中心としての権限を奪われ、もはやこれまでのように「見えるがまま」の事象の記録という方法に安住することは出来なくなります。彼は自分の周囲を巡る実在の「みせかけ」の運動（仮象）から、彼に対して直接には現象しない実在そのものの真実の運動を区別し、その客観的の把握を目ざさなければなりません。そこでは、彼が地上における自分の位置から記録する天体の運動はもはや単なる手懸り以上のものではありません。彼は実在の真相（客観的真理）に接近するために、経験的所与との直接的融合（主客未分の自己中心性）から自己自身を引離し、従ってまた経験的所与の直接的確認という活動からますます遠ざかることによって、自己自身の活動性を大幅に拡大し、かつ質的に転化せざるを得ないのです。地動説なる自然科学的認識——実在の真相の反映——は、実は以上の如く「脱中心化」し、一層の自律性を確保した主観の能動的な活動、すなわち操作的・演繹的な合成を通してのみ達成されたのです。

ガリレイたちの活躍が、人類の自然認識の上に新たな一頁を開いただけでなく、叙上の意味において人間の知性の歴史にもひとつの画期を齎したものであるとすれば、それは単に自然科学上の事件であるだけでなく、私たちの主題である教養の問題に対しても深い関連をもつ事柄に違いありません。それについて示唆的なのはやはりピアジェ心理学の次の認識成果です。すなわち、「具体的操作」の段階に到達した子供たちは、「可逆的な」操作・合成及びそれによって保証された新たな概念によって外界を自分の観点から脱中心化し、客観的に把握することができるようになりますが、恰もそのことと相関的に、道徳感情や社会行動の上でも新たな目醒しい進展を遂げるのです。すなわち、互いに承認しあった約束や規則を守って共同で行動したり、互いに相手の立場を配慮したりするといった、いわば道徳的・社会的な意味における脱中心化を達成するわけです。このことは、ある領域における人間の活動とその成果は、もしそれが教養的に普遍化されるならば、人間にとって重要なあらゆる領域に通用性をもつ、ということを示唆しております。事実、ガリレイの科学的成果とそれを齎した思惟様式とは、単に自然科学という人間活動の一領域に局限されない社会的意義を獲得したのでした。——以下、ブレヒトとともにそれを追跡しま

しょう。

#### IV

では、いよいよ件のテキスト『ガリレイの生涯』を繙くことに致しましょう（この作品は夙に千田是也氏によって邦訳され、白水社版『ブレヒト戯曲選集』に収録されていますが、今回は、昨年岩波文庫に加えられた岩淵達治氏の新訳を使用することにしました、——これは諸君の入手の便宜を考慮したからに過ぎません）。

周知の古典劇や通常のドラマに親しんできて、今はじめてブレヒトの作品に触れられる諸君ならば、まずこの作品の様式に瞠目されることと思います。もっとも最近では、実験的な前衛作品から幾分いかわしいアングラ劇に至るまで、ありとあらゆる様式が出揃っており、むしろ氾濫しているとさえいってよい状況ですから、その面での斬新さにはもはや不感性になっている方も少ないかも知れません。しかしブレヒト劇の様式は、彼自身「非アリストテレス美学」と称する独自の思想的根拠から導かれたものなので、やはり最初にこの点に言及しないわけにはまいりません。

御覧の通り、この作品は普通の戯曲と違って、三幕とか四幕とかの大きな区分けがなく、全体が15の比較的短い場面に仕切られ（ブレヒトの他の作品には、もっと短い多くの場面から成るものもあります）、しかも各場面には予めその場面の出来事を指示する標題が掲げられています。またストーリーの展開にしても、例えば一定の起承転結があり、クライマックスを経て結末（破局・幸福・解決など）を迎える、といったような、演劇についての通常の表象から期待されるそれとは大いに趣きを異にしております。ここにあるのは、ある生涯の重要な断面の集積から成るひとつの年代記にほかなりません。——このような様式は、ブレヒトにあっては決して単なる便宜上のものではありません。例えば各場面のはじめに掲げられる標題は、それによってある主体的な構えを、すなわちこれから起る出来事に批判的な眼を向けようとする構えを、予め観客のうちに喚起するという効果を狙ったものです。また、各場面は決してひとつのストーリーの展開に融解することのない特異な状況を表現し、あるいはその

状況固有の問題を鋭く集中的に提起しております。そしてひとつの作品は、これらの相互に際立った場面の断続的進行の結果、ある高次の意識状態が実を結ぶように構成されているのです。以上のことから、ブレヒト劇の様式上の独異さは決して単なる様式上の事柄に尽きるのではなく、演劇の任務と使命についてのブレヒトの思想の独異さと不可分のものであることが幾分とも了解されたかと思えます。

演劇についてのブレヒトの考えは、演技者（俳優）に対する彼の提言のうちに端的に示されています（以下、ブレヒトの諸論文の内容紹介については、一々出典を示しませんが、千田是也氏や小宮暁三氏らの翻訳に大にお世話になったことをお断りしておきます）。普通、演技者が自分の持役になりきり、いわばその持役に完全に感情移入し、まさに本物の如く演ずることは称讃に値することと考えられています。しかしブレヒトはこのような通俗的見解に強く異議を唱えるのです。彼は自分の主張をひとつの興味深い実例によって説明しておりますので、ここに御紹介しましょう、——街頭で自動車が人を撓ね、大怪我をさせるという事故が発生したとします。事故の目撃者は、証人として自分の目撃した事実を他の人びとの前で実演して見せなければなりません。しかし彼は起った事態をありのままに再現するのでしょうか。それが文字通りありのままの再現でしたら大変なことになりますし、また可能な限り実際に近づけるということも、彼の実演の目的からすればあまり意味のあることではありません。彼はその実演において社会的意義をもつ目的——事故の責任の判定や損害賠償の決定のために証拠を提供すること——を追求しているのであり、それ故、その目的に対して適切な限度で模倣の完璧さを決定すればよいのです。彼は彼の実演を見守る人びとを、事故を目撃したときの自分と同じ立場に立たせる必要はありませんし、また彼らにその時の自分と同じ体験を体験させる必要もありません。必要なことは、見物人が公正な判断を下せるように、彼らの批判的な眼に事態の真相を「示す」ことです。そのために彼は、まったくありのままではなく、不必要な部分は省略し、肝腎な部分は拡大し、時には実際よりもゆっくりと、またしばしば繰返し演じて見せなければなりません。彼の実演の意義は「模倣」よりもむしろ「表示」にあるのです。芸術的演技について

も同じことが云えます。演技者が彼の持役になり切り、持役そのものが舞台の上に具現されるのでは、芸術家としての彼の面目はまる潰れです。例えばある俳優が世にも穢わしい存在であるナチの親衛隊員を演ずる場合、身も心も親衛隊員になりきり、ありのままの親衛隊員を再現したのでは、舞台の上にはもはや芸術も芸術家も存在せず、穢わしい現実が裸のまま放り出されているだけでしょう。本当は、演技者は彼の持役であるこの穢わしい存在を観客の批判の対象たらしめるべく表示して見せ、そのことによって、このような存在に批判的である芸術家としての自己自身をも——品位と尊厳を具えた彼自身の精神をも——舞台の上に実現しなければならないのです。芸術は醜悪なものの醜さを美しい仕方、野卑なものの卑しさを品格ある仕方、描写できるのだ、とブレヒトは指摘します。しかしそのためには、演技者は自分の持役との間に常に「批判的な距離」を確保しておく必要があります。そしてこのことは、観客と自分が表示する形象との間に醸成されるべき「批判的な距離」に呼応しているといつてよいでしょう。

「批判」ということと関連して、ブレヒトの演劇理論の枢要ともいふべき重要な概念に触れておきたいと思います。それは V-効果（異化効果 *Verfremdungseffekt*）と呼ばれるものです。「異化」とはいうまでもなく「同化」と対立する概念であり、ブレヒトはこれを、共感・同情・一体化・感情移入などの「同化作用」を原理とする伝統的・通俗的な演劇観への反指定として掲げたのです。彼は同化作用的演劇観の原型をアリストテレス美学のうちに発見します。アリストテレスはその著『詩学』のなかで、優越した人びとについてのドラマである悲劇について、汎く熟知された次のような考えを表明しました。すなわち、悲劇の機能は、俳優によって演じられる模倣行為によって、観客のうちに燦爛や恐怖などの共感や共同体験を惹起し、日常生活のなかで内面に鬱積しているこの種の感情の浄化（カタルシス）を果すことだ、と。ここでは人物も状況も観客に対してはただ与えられるままの「やむを得ない」「手の施しようのない」もの、そしてただ一方的に観客の心を自らのうちに引き込むものであり、その効果もまた感情の解放、情緒の排泄といった生理的次元に近い反応に過ぎません。ところでブレヒトに従えば、芸術が取扱う現実——人物や状況——は、

人びとが無批判的にそこに融即すべき所与ではなく、人びとによって発見され、作為の対象として把握されなければならないものです。芸術は人びとが無批判的に馴染んでいる現実を、人びとの批判的検討に曝すべく、決して馴染み深くはないものとして表示する使命を担います。

解りやすくするために、少し角度を変えて考察を進めましょう。江戸時代の秀れた哲学者・三浦梅園（1723-1789）はかつて次のようなことを云いました、すなわち、人びとが自然を洞察できないのは、物事に懐疑の眼を向けることを知らないからだ。地震や雷が起ると、人びとは驚いて「何故か」と問うが、「何故平素は地震や雷が起らないのか」と疑うものはいない。天体の運行・万物の造化など、周囲に不思議なことは山ほどあるのに、誰もこれを不思議とは思わない。それはこうした物事を見慣れ聞き慣れているうちに、いつしか「泥み」（習気）となり、当り前のことと受け流すようになるからだ。学問をするにはまずこの習気を拂拭しなければならない、と。梅園のいわゆる「泥み」とか「習気」とかは、自然に対してばかりでなく、私たち自身の社会生活に対しても——むしろ一層深刻な形で——生じがちです。例えば、知り合いのある中学生（女子）が、ひと月ばかりアメリカに体験留学したときの感想として、子供たちの間にまで及んでいる黒人差別の酷さに驚いたと漏らしていましたが、この「差別」という事態は、差別を受ける黒人側からすれば継続的な苦痛であり屈辱であっても、差別する白人にとっては極く当り前の日常茶飯事、ことさらに意識する必要もない「自然の掟」の類いに過ぎないでしょう。しかし日本の中学生の「泥み」のない眼には、それは当然どころではない、極めて異常な光景として映ったのです。

ところで科学の場合、所与の現象からその奥の真相を掴み出すためには、人間は実験などの手段を用いて対象に働きかけ、これに一定の変更を加えることが必要です。『ガリレイの生涯』の最初のあたりを御覧になって下さい。ガリレイの天文学の勝利は、自分と対象との間に望遠鏡というひとつの中間的環境を介入させ——それは自ら創出した新しい環境です——、自然から届けられる直接の情報をその中で変更させることによって達成されたのです。芸術家が現実を描写する場合——勿論、ただ漫然とではなく、そこから真実を掴みとる真

面目な意図のもとに描写する場合——、やはり芸術特有の手段に訴えてこの現実 に一定の加工を施さなければなりません。現実態としての作品は、むしろこの加工・彫鏤の成果そのものでしょう。

ところで、「異化」とはブレヒト流の特別に意識的・方法的な芸術的描写の仕方でした。つまりそれは、私たちの馴染みとなっている故に却って真実の見えにくい状況を、真実の穿鑿に供し得るような馴染みない形態に向けて芸術的に変形すること、と行ってよいでしょう。「異化する」描写は、何よりも描写される現実から「解りきったこと」「手だしができないこと」「変えられないこと」といった印象を剝離します。そしてこの作品（舞台）は、観客との間に「異化効果」と称される独特の交渉を結ぶのです。舞台は自らの表示する現実への観客の同化・埋没を峻拒し、彼らとの間に一定の有意義な距離を創り出します。観客はこの距離を通して、舞台の上を決して自明ではない、黙って見過すことのできない状況を発見し、あれこれと批判的な吟味を行ないます。ところで批判とは——現実に対する批判的認識とは——、この言葉の日常的使用においてしばしば誤解されているような、消極的・傍観的態度を意味するものでは決してなく、むしろ反対に、異論を唱えたり変革に務めたりする主体の能動性・行動性・積極性の不可欠のモメントにほかなりません。「河川の水路を批判するとは、つまりそれを改良し補修することである」（小宮訳）とブレヒトは云います。異化による最初の効果は、これまで自明と思われていた事柄から観客を引き離し、そこに決して自明でない状況を発見させ、批判させることですが、こうした対象への批判は、これまでそうした状況に対して何もしてこなかった自己自身のあり方への批判として帰って来ます。対象批判を媒介とするこのような対自的・反省的な自己批判、——それはまさに自覚と呼ぶべきものでしょう。異化効果は、こうして第二に、観客のうちに自己の社会的責務への自覚を促します。——端的に言えば、異化効果の狙いは、観客に意識的な精神活動を行なわせることにある、と行ってよいでしょう。更に言えば、それはただ情緒の鬱積を「排除」するだけの浄化作用（カタルシス）とは違って、観客の精神を高度の意識性・能動性・社会性へと「充実」する役割を果すのです。

以上のことから御判りの通り、ブレヒトの芸術論は、私たちのテーマである

教養の問題に深く結びついております。この講演の最後の部分で、私なりの教養概念の規定を提起する予定ですが、ここで少し先廻りして、以上のことと関連する、教養概念の確立上重要な次の二つの点を指摘しておきます。

① 異化された描写は、単に観客ひとりひとりの精神を意識的にするだけでなく、鑑賞が終わった後の観客たち間での「批判的な対話」を活発に促すでしょう。このような対話を通して、ひとりひとりの認識や自覚は、公共的に練成され——社会的な「価値場」を形成し——、今度は逆に、ひとりひとりはこの場との関連で自己の認識や自覚を規定していきます。対話における公共性を抜きにして教養の問題を考えることはできません。文化的な題材をめぐる対話が欠乏しがちで、そのことが民主主義の成熟のひとつの阻害要因となっている我国の状況のもとでは、この点はとくに重視されるべきことと思われま

② 対象と自己との間に異化効果として設けられる距離を、私はさきほど「有意義な距離」と呼びました——ブレヒトの真意からの逸脱を怖れず、敢えてこう呼びました——が、その意味は、そこで対象に対する人間主体の生産的な往還運動が営まれる距離、ということでした。自明の・手のつけられない・ものではないという対象への批判的認知は、媒介的に、自己自身への批判的反省へ、従ってまた「何をなすべきか」の当為的自己規定へと還帰するわけですが、これはまさに「認識の課題化」の営みにほかなりません。事態を認知するだけでは教養とはいえません。認識の課題化的変容こそ、教養的知性の活動の重要な要素といえるでしょう。

## V

以上、ブレヒト劇の様式の問題から彼の演劇理論の要点へと話が及んだわけですが、今度はテキストの内容に眼を転ずることに致しましょう。

はじめにガリレイは、何よりも時代の子として、さまざまな方向への展開の可能性をひめた多面的性格をもつ形象として登場します。彼は真理への情熱と未知への好奇心に充ちた学究であり、秀れた学究の多くがそうであるように、真理を伝えずにはいられない教育者です。しかしそれだけでなく、美食と金銭への渴望においても決して人後に落ちない俗物でもあります。一応読了された

諸君は、真理のために果敢に闘う中盤のガリレイ、凋衰と老醜で見るかげもなく、鷺鳥のレバー料理を貪り食う終盤のガリレイを、もう一度はじめの場面に重ね合わせてみるのも面白いでしょう。ともかくここでは、彼の多面的な性格は時代の息吹きと呼応して彼のうちに生きいきと働いております。彼は、中世の暗雲の切れ目から射しはじめた光を万身に受けて、新しい時代の到来を力強く告知する人物なのです。

ガリレイは、自分の家政婦（サルティのおかみさん）の息子である利発な少年・アンドレア（後にガリレイの弟子の物理学者）に、新しい科学の話を中心にして聞かせます。ここで教育者ガリレイが、自分の教育の相手について、身分的偏見にまったく囚われていないことに注意して下さい。彼は「市場で天文学が話題になる」時代、「魚売りのおかみさんの息子たちも、争って学校に行くようになる」時代を期待をこめて予言しますし、また後の場面で、頑迷な学者たちに抗議して、レンズ研磨工・フェデルツォーニを学問的討論の対等な参加者として認めさせます。

ガリレイはアンドレアに次のように話します、「二千年もの間、人類は、太陽をはじめすべての天空の星が地球のまわりを廻っていると信じていた。法王も枢機卿も、王侯も学者も船長も商人も、魚屋のおかみさんも学校の子供も、みんな、この透明な天球のまんなかにも動かずに鎮座していると信じてたんだ。でも今やわれわれはそこをとり出していくんだよ、アンドレア。大航海に旅立つんだ。なぜって古い時代はおしまいになり、新時代が来ているからだ。」知識の上での新時代の到来は、しかし単なる自然科学の一領域の出来事にとどまりません。「町々は狭苦しい、それと同じで人間たちの考えも狭い。迷信にペストと来る。でも今こんな有様だからこそ、このままであるはずがない、と考える時が来たんだ。だってすべてのものが動きだしているんだからな、君。」ここで大切なことは、ガリレイが、科学上の新しい知見と、その社会的意味——「教養的意味」とも云い添えておきましょう——との関係を適確に把握しているということです。このことは、この作品の結末との関係で重要な意味を帯びてきますから、ここでしっかりと念頭に刻んでおいて下さい。

ではこうした天文学上の知見がどうしてそれほどの社会的意味をもつのか。



劇中のガリレイは云います、「そして地球は楽しそうに太陽のまわりを廻り、そして魚売りのおかみさんも、王侯も、枢機卿も、おまけに法王まで、地球といっしょに廻りだした。宇宙は一晩のうちにその中心を失い、朝になってみると無数の中心をもつようになっていた。そこで今ではどんなものも中心と見做され、同時にどんなものも中心ではなくなった。だって突然場所が大きくなりすぎたんだものな。」

この言葉を理解するために、まずひとつの円を想像して下さい。一定の円周をもつ有限な円は、ひとつの、そして唯一の、中心点をもっております。この中心点は決して動かすことのできない絶対のものであります。ところがもし無限大の——従って一定の円周をもたない——円があると仮定すれば、そこには特定の中心点があり得ないと同時に、どこでも中心となることができます。これと同じことで、もし全知全能の神だけが無限の存在者で、神によって創造された現実世界（宇宙）は有限な存在であるという仮定——これが当時の伝統的な考え方でした——にたてば、宇宙にはある絶対的な中心があり、その中心との関係に規定され尊卑貴賤の位階序列が成りたつ、ということになります。これとは反対に、地球からその中心的性格を奪い、その延長線上において、この現実世界（宇宙）そのものが無限であると結論するならば、私たちはもはやこの世のどの点をも中心と見なす必要がなくなると同時に、どの点をも中心と認めてよいこととなります（以上は、劇中でも幾度か話題に登る、いま進行中の場面からほぼ10年前に宗教裁判によって焚刑に処せられた有名な哲学者ジョルダノ・ブルーノの考えです）。こうなると、法王も王侯も、社会の中心とか、あるいは中心に近いとかいった権威を失い、農夫や魚屋や天文学者と同じ次元にたちます。農夫や魚屋や天文学者も、自らを中心としての尊厳において自覚し得るとともに、同じ尊厳を承認された他の人びとと対等の人間関係を結ぶことができます。自然科学という一領域における「脱中心化」の成果は、もしそれが一定の知的機構——これについては最後の部分で詳述します——において普遍化されるならば、人間の社会生活全般の上に「脱中心化」された知見を齎します。それは不合理な権力支配や、それを支えるさまざまな偏見・迷信に対して鋭い批判となって現れるでしょう。権力者やそのイデオログたちの新しい

科学への恐怖は、決して理由のないことではなかったのです。

かくてガリレイは、単に科学の偉大なパイオニアであっただけでなく、同時に新時代の教養の支担者でもあったのでした。

## VI

とはいえ、——わがガリレイもやはり自分自身の生活を維持していなければなりません。

ガリレイの台所を預る家政婦・サルティのおかみさんにしてみれば、ガリレイが彼女の息子に聞かせるこんな途方もない話に感心などしてられません。何しろ台所は火の車、牛乳代の借金の支払いにも事欠く有様です。パトヴァの数学教授という地位は、名誉ではあってもそれに見合う収入を齎してはくれません。ガリレイが潤沢な収入にありつくには、個人教授の授業料を払う生徒を受入れるほかないのですが、しかしそれをすれば、研究時間を奪われ、彼が何よりも大切に思っている学問研究に大いに支障を来します。彼はサルティのおかみさんの懇懇にもかかわらず、これ以上個人教授を引き受ける気持にはなりません。

ガリレイが願い出していた俸給の値上げも、にべもなく断られます。彼の属していた数学科は当時まだ志願者の殺到する分野ではありませんし、またお上が重視するのは、神学のようなイデオロギー上有益なものか、それとも「比例コンパス」——資本の複利の計算や大砲の弾丸の重さの測定に役だち、おまけにそれを使うと頭の弱いグリッチェ將軍でさえ平方根の計算ができるという——のような実用品、あるいは商業上有益なもの、といった類いです（この点では、今日、自動車の輸出で世界を鳴動させている東洋の——屈辱的にも「西側陣営」と自称している——某先進国とあまり事情は違わないようです）。ガリレイの不満に対して大学の事務局長は、ヴェネツィア共和国では、俸給はたっぷり支払っていないかもしれないが、その代り研究の自由は充分に保証している、と云い放ちます。

ところで、この事務局長が現われる少し前にある人物が登場します。それは、「学問も少しは必要だろう」と母親に諭され、立派な紹介状を携えて個人教授

を頼みに来た、富裕な、しかしあまり伶俐ではない青年（ルドヴィーコ）です。ガリレイは、この青年を最初はあまり歓迎してはいませんが、話しているうちに彼は耳よりの情報をガリレイに与えます。すなわち、緑の皮の鞘と二枚のレンズでできた奇妙な筒、それを覗くと何でも五倍に見える奇妙な筒が、わずかに、三日前にアムステルダムで売り出されたというのです。そこでガリレイはある計略を思いつきます。つまりこの玩具に手を加え、自分の発明品と偽って共和国に贈呈し、共和国から報酬をくすね取ろうという算段です。彼はこの円筒に商品としての販売価値と軍事上の利用価値と、それに「私の17年に及ぶ忍耐を重ねた研究の結晶」という嘘偽りの弁明とを添え、「望遠鏡またはテレスコープ」と名づけて共和国に贈呈します。だが、——そこはガリレイ。彼はこのペテンの産物からまったく別箇の価値を、すなわち自分の天文学研究に裨益するかけがえのない価値を引き出したのです。金のために澁々浪費したはずの時間から、実は大変な収穫が齎されたのでした。

彼の「成果？」を讃える贈呈式の席上、彼の心は最初の狙いであった報酬すらもはや眼中にないほど昂揚しております。彼は同席の友人サグレドにささやきます。「……ここにいるお歴々は金になるいんちき品を手に入れたと思っているが、実はこれはもっと価値があるのだ。僕は昨夜この筒を月に向けて見たよ。」サグレド「何が見たかね。」ガリレイ「月は自分では光を放ってはいない。」サグレド「何だって？」——望遠鏡に映る月の表面は、他から受けた光を反射して、凹凸のある粗雑な相貌を呈しているのです。ガリレイは人類がいまだかつて確かめたことのない秘密をすでに見届けていたのです。思わず戦慄の走るような場面といえるでしょう。

以上御覧の通り、劇中のガリレイは、高貴な理性と低劣な俗物根生とを併せ持ち、その都度どちらにも成り変りながら、時代の状況を生き抜こうとしているのです。このあたりのブレヒトの絶妙な描写に注目して下さい。

ところで、ブレヒトはここでもまた、私たちがさきにピアジェの発生的認識論において確認しているあの思考の働きを生きいきと伝えてくれます。ガリレイはサグレドに、月から見れば地球もやはり青白く輝いていると確言します。ガリレイ「月が輝くのと同じ理由だ。どちらの星も太陽によって照らされてい

る。だから輝くんだ。われわれの見る月と、月から見たわれわれは同じものだ。……」サグレド「じゃ月と地球には違いはないのかい？」ガリレイ「明らかにないらしい。」サグレド「ローマである男が焚刑になってからまだ10年もたっていない。彼の名はジョルダーノ・ブルーノ、その彼も同じ事を主張したんだ。」ガリレイ「その通りだ。そしてわれわれの方は現にそれを見た。筒に目をあててみる、サグレド。君が見ているのは、天と地に何の区別もないということなんだ。今日は1610年の1月10日だ、人類はその日記にこう記入するだろう、天が廃止された、と。」——以上の会話は、自己の視点に固執し、そこから一方的に相手を観るのではなく、相手の側に視点を置き換え、そこから自分の側を観かえすという操作がガリレイの思考において営まれていることを示しています。こうした思考による客観化の帰結として、自己中心的思惟——もっともこれは単に未熟なだけの幼児の思考と違って、階級的利害に淵源するある積極的な価値的意味づけの操作を伴うので、私はかつてこれを価値論的の中心化と呼びました——の所産である「天」は失墜を余儀なくされ、長く不動を誇った天と地の形而上学的区別はまたたく間に雲散霧消に帰したのです。

この結論は古い権力者とその取りまきに恐怖の予感を与えますが、反対に新時代の担い手である民衆はそこから限りない希望を汲み取ります。こうして物語はひとつの社会的なドラマへと展開するのです。

## VII

よりよき研究条件を確保するため、ガリレイはヴェネツィア共和国を去り、フィレンツェの宮廷（トスカナ大公家）の庇護のもとに趨ります。フィレンツェのガリレイの家では、望遠鏡を覗きに来る客が後を絶ちません。やがてまだ頑はない子供であるトスカナ大公（コスモ）も盛んな好奇心を燃やして覗きにやってきました。だが、彼とともに集った学者たちは、望遠鏡によるガリレイの発見と学問上の新説に対して頑迷な不信を表明します。第4場では旧説に執着する固陋な学者たちと、ガリレイや彼の協力者（レンズ研磨工）フェデルツォーニなど、新しい学問の旗手たちとの間で迫真の学問的討論が展開されます。ブレヒトは芸術と学問とが相互に没交渉の人間の活動領域に属するという

「忌わしい常套語」に反対し、学問もまた *amusant* であり得るし芸術もまた学問と無縁ではあり得ないと主張してきましたが、私達が臨んでいるこの場面は、学問的論議そのものが芸術的に劇化され得ることの見事な実証とも云い得るでしょう。それとともに、この場面はそのまま今日の学問状況や、私たちの知的活動のあり方に対しても鋭い批判の照明を投げかけているのです。

ところで、このような性格の場面なればこそ、ここから適切な引用を行なおうとすれば、全部を引き写さなければなりません。ですから、ここでは、作品の魅力を害うことは承知の上で、諸君の理解の助けとなるように要所を抑えるにとどめたいと思います。

#### ① 出発点

固陋な「学者たち」とガリレイたちとは第一に学問の出発点が違います。ガリレイたちが、まず望遠鏡を覗き、そこに確認される揺ぎない事実から出発しようとするのに対して、「学者たち」は、すでに手許に望遠鏡があるというのに、遅疑逡巡してなかなか覗こうとはしません。彼らは、望遠鏡にとりつくに先立って、予め「かかる遊星は存在し得るか」というテーマで「形式論的討論」を行なうよう要求します。新しい事実を認めざるを得なくなったときに古い体系に損傷が及ばぬよう予め形式を整備しておこうという意図なのでしょう。これに対して、ガリレイたちの側からすれば、新しい事実と直面した以上、それを組み込み得るように既成のシステムを変更し再編成すればよいわけです。

なおここでは端的に「事実」と云いましたが、それが決して実証主義的・現象主義的意味における経験的所与や感覚データの類いではなく、望遠鏡という研究者自らの創造した中間的環境のなかで変更された——彼自らの能動的行為によって別袂された——データであることは、さきにお話しした通りです。主体的な操作や構成や定式変えの介入しない直接的な所与は、かえって主観的なものに過ぎず、そのために学問体系を変更せざるを得ない事実としての資格をもたないこと——例えば旅行者の見聞記や体験談などの多くが、旅行先の社会の実態を伝えるものとしては甚だ信用がおけないこと——に留意して下さい。

#### ② 討論の条件

「学者たち」は、学問的討論の際に、学問の内実とは無関係の権威を求めま

す。「学者たち」のひとり・哲学者は、ラテン語を用いて論証を開始し、それに対するガリレイの反対——ガリレイは同席のフィデルツォーニがラテン語を知らないからと云って、ラテン語使用を止めさせます——に対して、「私の論証はラテン語でないと光彩を失うのですがね」と抗弁します（現在の我国の学界におけるヨーロッパ語文献の「権威」をみれば、これは決して単なる過去の奇習とはいえません。なかには、日本語で書かれた日本人の業績にまったく眼を向けぬ学者さえいます）。

「学者たち」はまた、レンズ研魔工・フィデルツォーニが学問上の問題に容喙することに対して露骨な不快の表情を隠そうとはしません。哲学者はガリレイに向って、「あなたの使用人に学問的討論について忠告めいたことを述べてもらいたくありませんな」と云います。ところが、ガリレイはむしろ技師や機械工たちの知見や見識に積極的な期待を抱いているのです。否、劇中のガリレイにとって、勤労民衆の学問や教養の世界への参加こそ新時代の到来を示す輝かしい徴表にほかなりません。後の場面でガリレイは云います、「新しい思想のためには手を使って働く人々が必要なんだ。物事の原因が何であるかを知りたがる人は、こういう人々を措いて他にあるかい？ 焼きあがったパンを食卓で見るだけの人は、それがどう焼かれたかなんて知る気はない。そういうやくざな奴は、パン屋より神様に感謝するというだろう。」

### ③権威と真理

「学者たち」とガリレイたちとの決定的な相違は、何よりも学問内容に関する「権威」と「真理」との対立にあります。「学者たち」にとって重要なのは、「神のごときアリストテレス」の権威及びその権威と結びついた「完全なる秩序と美の体系」であり、従ってこの調和に破壊を齎すようなどんな事実も認めるわけにはまいりません（少し注釈を加えますと、このような不動の秩序に美と荘嚴を見出すのは、不動を是認し変化を嫌悪する主観の価値作用の結果なのであり、反対にガリレイたちからすれば、不断の運動のうちにある無限の豊かさをもった宇宙、人間に絶えず発見の喜びを与えてくれる宇宙こそ、美でもあり荘嚴でもあったでしょう）。彼らはガリレイの発言に対して「根拠」を示せと迫りますが、彼らのいわゆる「根拠」たるや、「アリストテレスの権威」に

ほかならないのです。彼らにとって、「余人ならぬ神のごときアリストテレスその人の権威を根拠とし」、そこから無矛盾的に演繹される結論のみが妥当性と通用性を承認され得るのです。彼らが権威を盾に真理を峻拒するのは、それが「どんな結果を招くか」という怖れからに過ぎません。哲学者は云います、「(荒々しく)ガリレイさん、真理はわれわれをとんでもない方向に導いていくかも知れませんよ！」

一方、ガリレイたちにとっては、すでに手許までたぐり寄せた事実承認に当って既成の権威に拘泥しなければならぬ理由は毫末もありません。「われわれの時代の子は真理であって権威ではありません」とガリレイは叫びます。ガリレイたちにとっては、権威を根拠とした巨細に渉る演繹の伽藍、人びとの営為を身動きもできぬ桎梏のもとに置いていた理論的がらくたの堆積が、どの側面からであれ、確実な真理の発見によって音をたてて崩壊し始めるその時点にこそ、新時代の浩浩たる展望が開かれるのです。ガリレイは云います、「……イタリアの耳目をそばたてているのは、二、三の遠くの天体の運行ではなく、ゆるぎないと思われていた理論がゆるぎだしたという知らせです。誰もこの古い理論は数が多すぎることを知っています。皆さん、ゆるぎだしている理論の弁護をするのはやめようではありませんか！」ガリレイにあっては、「どんな結果を招くか」という憂慮から事実についての判断に制約を加えること——アプリアーナ、同時に自己中心な目的によって判断を限定すること——は、そもそも学問的手続きとしては本末を顛倒したものにほかなりません。「真理がわれわれをどんな方向に導いていくか」などということは、真理を問題としている限り考慮に入れるべきことではありません。「われわれをどんな方向に導いていくか」——それはむしろ我々自身が真理を駆使することによって決定すればよいことです。

——以上の通り、この討論をいくら続けても、「学者たち」とガリレイたちとの間に決着のつけられる見込みはありません。「学者たち」にとっては、望遠鏡に映る事実によって彼らの遵奉する理論体系に動揺を来さぬ保証を、この「形式論的討論」によって予め取りつけておこうという最初の算段は、どうやら成功しそうにもありません。そこで彼らは望遠鏡を覗くことを取りやめ、

「ほんとにただ筒をのぞいて下さればいいんですよ」というガリレイの言葉を振り切って、その場を退場します。トスカナ大公・コスモ少年も、哀れ遂にその好奇心を満すことはできませんでした。

## VIII

さて、すでに大部時間が過ぎてしまいましたので、途中の経過については極く簡単に触れるにとどめ、大急ぎで最後の場面に進みましょう。

さきにも申し上げた通り、権力者と民衆はそれぞれまったく対立する観点から、ガリレイの天文学のうちに、単に天文学という一領域に留まり得ない結論を発見します。民衆の声を代表する大道物語歌手は、地球が太陽の周りを巡りはじめ、宇宙に絶対的中心が消滅した結果、人間相互の関係も逆転し、これまで屈従を強いられていた人びとがそれぞれ自己の権利を主張しはじめたことをユーモアたっぷりに謳歌します。他方、これまで権力の中枢、社会の「中心」に居坐っていた人びとは、ガリレイの天文学によって宇宙が「巨大な距離」を獲得した結果、「高位の聖職者や、いや枢機卿でも、(人びとの)目にとまらなくなってしまう」、「上と下の区別も、永遠なるものと移ろいゆくものの区別も存在しない」という思想が世を支配しはじめることを恐怖します。

こうしてガリレイは宗教裁判所に引き出されます。ガリレイが恐るべき拷問機械を見せられながら、学説を撤回するよう脅迫されている間、フィレンツェ公使の邸内では、アンドレアはじめガリレイの弟子たちと、ガリレイの娘ヴィルジーニアは焦々しながら結果を待っています。ヴィルジーニアは、父が学説を撤回して救われるよう祈っており、弟子たちは反対に、師がたとい命を賭しても真理を守り抜くことを願っております。長い時間の経過は、ガリレイの必死の抵抗を物語っています。だがやがて、——ガリレイの学説撤回を伝える教会の鐘の音が鳴り響きます。偉大な真理が権力者の手によって汚された瞬間、ヴィルジーニアはほっと胸を撫でおろし、弟子たちは——これまで科学と人類の光明のためにこそ師と苦楽を共にしてきた弟子たちは——深い落胆の淵に沈みます。やがて登場するガリレイに向かって、アンドレアは、「英雄のいない国は不幸だ!」と叫びますが、憔悴したガリレイは、「違うぞ、英雄を必要とす



る国が不幸なんだ。」と力なく答えます。弟子たちは師の裏切りを非難し、ガリレイのもとを去ってゆきます。

数年の後。——自宅に軟禁されている囚人ガリレイは、もはや半ば盲目となり、美食への嗜好に生命の残骸を示すだけの衰れた老人に過ぎません。しかしその長い軟禁の年月の間に、彼は、監視に当たっている僧侶やヴィルジーニアの眼を盗み、最後の力を振り絞ってかの記念碑的な著述『新科学対話』を完成させます。そこへかっつての弟子アンドレアが来訪します。彼はオランダへ向う旅の途路、オランダの学者の依頼でガリレイの近況を窺うために立寄つたのです。アンドレアは、はじめはただ冷やかに具合を尋ねますが、やがて『新科学対話』のことを聞くと、かっつての屈従によって師の科学的良心が決して灰燼に帰したのではなかつたこと、この厳しい監視のもとで師の科学への献身が孜々として続けられていたことに深く心を動かされます。こうして、この歴史的な草稿は、師の裏切りを痛罵した当の弟子アンドレアの手によって無事国境を越えることに成功するのです。

以上はブレヒトの作品の一応の結末ですが、彼がこの作品の完成稿においてガリレイの学問的生涯に与えている独自の解釈に触れる前に、それについてのより一般的な見方の一例をここに御紹介しておきましょう。すなわち板倉聖宣氏はその著『ぼくらはガリレオ』——これは中学生向きに書かれた著作ですが、科学の教養化という観点から見ても、著者の並々ならぬ見識の光る好著なので、大学生の諸君にも是非一読をお薦めします——の最後の部分で、晩年に至るまでのガリレイの闘いとその成果を次のように評価しておられます。

ガリレオの地動説論争は敗北ではなかつた。イタリアにいたガリレオは、無理に地動説はまちがっていると云わされてしまったが、ローマ教皇庁の権力のおよばない国々では地動説を研究する自由が残されていた。そこで、彼の『天文対話』と『新科学対話』とは、フランス、オランダ、イギリスなどのすぐれた科学者たちに読まれて、発展させられることになった。とくに、イギリスのニュートンは地動説とガリレオの運動の法則とをむすびつけて、天体のなぞを解く力学の原理を打ちたてることに成功した。

ガリレオは勝ったのである。

「ガリレオは勝ったのである。」——史実に即せば、これはまさに定説たるに耐える評価というべきでしょう。ブレヒトもまた、テキストの訳者・岩淵氏も明かにしておられるように、初稿の段階では、ガリレイの行為に肯定的な評価を与える傾斜を呈していたと思われます。

ところが、アメリカによる広島への原爆投下という深刻な事態は、「科学と権力の関係についての新しい視角を要求する」（岩淵氏）こととなり、この作品におけるブレヒトのガリレイ断罪を決定的にしたのです。最終稿の完成に先立って、ブレヒトは自分の作品への「覚え書き」（テキスト221頁）の中で、もしここに描かれたガリレイの行為が、科学の研究の継続と、その後世への継承とを可能にした理性的な行為として受け取られるとすれば、それはこの作品の大きな欠陥である、と云っています。ガリレイを断罪するブレヒトの論拠は次の通りです。すなわち、「現実にはガリレイは、天文学と物理学を豊かにした、だが同時にこの両科学から社会的な意味を殆ど奪いとることによって豊かにしたのである。天文学と物理学は、聖書と教会への不信を示すことによって、一時期はすべての進歩陣営のバリエードに立っていたのである。」科学は本来、社会的な意味、批判的な役割をそれ自身の機能のうちに内在していたはずで、またそれ故にこそ一時期は民衆から深い関心を以って迎えられたのでした。しかるに、ブレヒトの解釈によれば、ガリレイは科学からこのような意味や役割を剝奪し、それを厳しく限界の定められた、一部の専門家だけが携わることのできる特殊科学に純化してしまいました。このような没イデオロギー化の賜物として、科学はその後の比較的妨害の少い発展を保証されるわけですが、しかしまさにそのことによって、教会及びそれと結びついた全反動勢力は、科学的批判からの「秩序整然たる退去を完了することができ」、剩え科学の成果の管理・運用を科学外の力（権力）に委ねる方向に道が開かれたのです。ブレヒトはさらに「原子爆弾は、……ガリレイの科学的業績と、社会的な機能停止との生み出した古典的な最終生産物である」と高調しております。そしてこのような観点から、『ガリレイの生涯』の最終稿には大幅の修正が加えられたのでし

た。この最終稿における劇中のガリレイは、囚われの身にありながら『新科学対話』を書き上げたかつての師の科学者としての健在を喜ぶアンドレアを前に、沈鬱な面持ちで痛切な自己批判を表明いたします、「……疑うというわれわれ流のやり方は大衆の心を取りこにした。大衆は望遠鏡を私たちの手からひたたくって、それを自分たちを苦しめるもの、領主や地主や僧侶にむけた。これまで科学の成果をむさぼるもののように利用していた、利己的・暴力的なこのお偉方たちは、科学の冷たい目が同時に、何千年前から人為的に作られていた不幸の上にも注がれているのを感じた。この不幸は、明らかに自分たちお偉方が取り除かれることによって取り除かれるものだったのだ。そこで彼らは、われわれ科学者を、しつこく脅したり買収しようとしたりした。よほどしっかりしていないととても抵抗できないぐらいにね。しかしわれわれ科学者は、大衆に背をむけてもなお科学者でいられるだろうか？……私の時代に、天文学は民衆の集まる市場にまで達したのだ。この全く特異な状況下で、ひとり男が節を屈することをしなかったら、……自然科学者は、医者たちの間のヒポクラテスの誓いのようなものを行なうことになったのかも知れない。自分たちの知識を人類の福祉のため以外は用いないというあの誓いだ！……」

さて、私たちの当面の関心は、ブレヒトのガリレイ評価それ自体の是非にあるのではなく、「異化効果」に狙いを定めたブレヒトの知性が、この屈曲した作品世界において鋭く提起している問題——科学の社会的意味という問題——から、「教養概念の確立」という私たちの課題に裨益する重要な教訓を引き出すことにあるのです。以下、それを叙べましょう。

## IX

科学からの社会的意味の剥離、科学の教養化に対する拒絶、その意味における科学の没イデオロギー化は、極致に至ってどのような相貌を呈すでしょうか。——ここにその最も唾棄すべき実例をお目かけましょう。

諸君はオッペンハイマー事件というのを御存知でしょうか。1949年、アメリカがソ連の原爆実験成功に対抗し、核兵器の優位を確保すべく水爆の開発に踏み切ったとき、当時アメリカ原子力委員会（AEC）の一般委員会委員長を務め

ていた著名な物理学者オッペンハイマー (J. R. Oppenheimer) が、科学者の良心に基いて水爆の製造に反対したところ、「かつて共産主義者と交際していた」などと因縁をつけられ、1954年にすべての公職から追放されたという事件です (因みにこの数年間、アメリカでは、中国の植民地支配という野望が失敗に帰した後をうけて、マッカーシズムと称する狂風が吹き荒れ、多くの良心的知識人が弾圧と脅迫に曝されました。また原爆とは縁もゆかりもない市民ローゼンバーク夫妻が、スパイの冤罪を着せられ死刑に処せられたのもこの間の出来事です)。ところで、当局の意向を受けてオッペンハイマーへの迫害に一役買って出たのが、「水爆の父」といわれるエドワード・テラー (E. Teller) でした。彼はオッペンハイマーを非難して、次のような——私たちの主題との関係において極めて興味深い——発言を行ないます、「良心とは道徳的範疇であり、決して科学的範疇ではないということは、(私には) 明白である。ひとが予め道徳的・政治的または哲学的な先入見を以って科学的研究に着手することを、私はいずれの科学的研究にとっても不幸なことであると考えます。科学はこれらの観念とは何等の共通性ももたない、同様に宗教に対しても関与しない。これらのすべてのことは別の世界の問題であり、つまり科学はこれらの問題に対して無関心である。もし科学者が道徳の眼鏡で科学の問題を観察することに熱中するならば、彼は道徳家としてのみならず、科学者としてもまた正道を逸脱するであろう。オッペンハイマー教授の事件はこのことへの顕著な証佐である。」(この一文は、K. A. Schwarzman: Ethik ohne Moral, 1967, S. 142 からの重引です。原載は Jaroslav Putik のチェコ語の著書)。すなわち、科学が関与し得るのは範囲の限定された特殊領域に過ぎず、そうした領域が社会全体においても意義とか、その領域における研究が社会に齎すであろう結果とかいうような一定の価値判断を要求される問題は、科学とはまったく無縁の世界の問題であるから、科学者はこれらの事柄に僭越な干渉など行なわず、自己の職域的分限を守ってただひたすら研究に従事すべきである、ということです。件の問題との関連でいえば、核兵器の研究に携わる科学者の関心は、原子核の分裂・融合反応からどれだけエネルギーを引き出し、これをどれだけ破壊・殺傷効果に結びつけるか、ということに限定されるべきであり、それが人類に及ぼす影響

についての問題、あるいは核エネルギーの社会的管理に関する問題などのような、道徳や良心や政治や哲学などに係わりをもつ問題は、本来科学者の介入すべき問題ではあり得ない、というわけです。

この発言には、ブレヒトが『ガリレイの生涯』において摘発し警告している科学の頹落と、専門主義・職域主義に呪縛された科学者の非教養的な奇形化の極限の姿が見い出されるでしょう。それはまた教養の問題を取り扱っている私たちにあっては、恰好の「反面教師」ともいえるでしょう。ところで諸君は、エドワード・テラーの上記の発言に特徴的なひとつの逆説——この種の発言においては常に不可避的なひとつの逆説——にお気づきでしょうか。それはつまりこの発言自体が発言の趣旨に違反しているということです。と申しますのは、テラーの発言の趣旨は、科学者は自分の分限外の社会的な諸問題に関与すべきではない、ということでした。ところが、この発言そのものは、当局の意向を体現してオープンハイマーに追撃をかけるという社会的な意図のもとに公けにされた、それ故にまた強度のイデオロギー性を含んだ発言にほかなりません。他の科学者に社会性や道義性やイデオロギー性——一般に教養性——への禁欲を呼びかける当の科学者テラーは、自分自身では支配権力のイデオログとして頗る社会的に振舞っているのです。

ここでテラーは、自分の発言のなかで自己矛盾に陥っているだけではありません。オープンハイマーへの非難の内容もまた著しく事態を歪曲した結果から導かれたものなのです。テラーは、オープンハイマーに代表される科学者の態度を、「予め道徳的、政治的または哲学的な先入見を以って科学的研究に着手する」ものだとか、「道徳の眼鏡で科学的問題を観る」ものだとか云って攻撃しておりますが、これは何とも的はずれな攻撃といわなければなりません。オープンハイマーは、自分の専門分野における「科学的問題」に科学外の価値観乃至偏見から解釈や限定を加えているのではなく、それまで物理学者として自分の研究対象に向けていた科学的洞察力を、自分の専門と関係はあるにしても性格または領域を異にする他の問題、すなわち水爆の開発製造の是非をめぐる「社会的問題」に振り向けたのです。この「社会的問題」は、直接には彼の専門とする特殊科学の領域の問題ではありませんが、彼自身をも含む人類に

とっては共通の重要問題です。そして彼が自分の専門分野において働かせた卓抜な洞察力は、洞察力そのものとしては、社会や人類にとって重要なあらゆる領域、あらゆる問題に対して開かれているはずです。ブレヒトが劇中のガリレイに語らせた言葉を想起して下さい、「大衆は望遠鏡を私たちの手からひったくって、それを自分たちを苦しめるもの、領主や地主や僧侶に向けた。」——望遠鏡の筒先をある対象から他の対象に転換する、それと同じ作用がここではオープンハイマーという一個人の知性において営まれていたということができません。

さて、ここで重視されなければならないのは、ある領域乃至問題から他の領域乃至問題への洞察や理解の移項は、決して直接無媒介にはなく、あるシステム乃至「知的機構」に従って行なわれる、ということです。というのは、ある専門領域において発揮される秀れた洞察力も、それが一定の変換によって他の領域に及ぶことを保障するシステムを欠落している場合には、自分の属する限られた範囲から一歩も踏み越えることはできないからです。ひとはこのシステム（知的機構）によって、自らは社会の一領域を支担する専門家でありつつ、人類社会にとって重要なあらゆる領域やあらゆる問題に——いわば脱中心的に——開かれているのであり、専門外の領域や問題に関する見識や良識をもつことができ、また社会的な重要課題について他の領域に携わる人びとと連帯した共同行動をとることができます。序でに云えば、良心とか道徳とかいわれるもの——オープンハイマーの社会的な発言と行動が、単に科学的な洞察力だけでなく、良心や道徳、強固な社会的使命観によっても動機づけられていたことは、確かにテラーの指摘する通りです——は、決してテラーのいうような、科学的洞察を予め拘束するアプリアリな価値観、すなわち「偏見」や「眼鏡」の類いではなく、上記のような内的システムの具備する一定の性格や特徴を表現するものと私は考えます。ここでは、差当って、このようなシステムの成熟を人間的教養の最も端的な資格要件として抑えておきましょう。以上の観点からすれば、テラーの推奨する専門主義・職域主義への閉塞は、まさにこうしたシステムの、従って人間の教養性の排除を意味するものにほかなりません。そしてその結果は、「偏見」からの自由どころではありません。専門主義的な視点の自

己中心化は、——それを体現した当人もまた 社会的連関の中に生き、従って専門外の領域や問題に無関係ではいられない以上——それ自体特有のイデオロギー的の偏見を生み出します。自分の発言の自己矛盾をさえ反照する視点をもたないテラーの自己中心的知見が、彼の極めて悪質なイデオロギー性と直結していたことは、その好個の例証といえるでしょう。

少し角度を変えましょう。ここで私が非難の対象とした専門主義・職域主義、あるいは一般に視野狭窄的な無教養性は、ひとつの単純な反対物をもっています。すなわちディレッタントイズムと呼ばれているものです。ディレッタントイズムは、自己の職域外の事柄への特有に奇形的な関心のもち方を表しています。ディレッタント的博識は、その浮薄さと気障さの故に、当のディレッタント本人の得意をよそに、他人からはとかく嫌悪の眼を以って見られがちですが、しかしもしさきの専門主義者や無教養者の観点からこれを非難するとすれば、それは目糞が鼻糞を笑うような類いに過ぎないでしょう。ディレッタント的博識の欠点は、その博識そのものにあるのではなく、さまざまな領域への関心や知見を単なる好事的な関心や知見にとどめているということ、従ってそれらの関心や知見をひとつの「教養的品位」（フランスの物理学者 P. Langevin の言葉）にまで練成するところの、あるいはまた、それらを「国民のひとりとして社会生活に参加することのできる生活能力」（村山俊太郎）たる人格的な力にまで組織するところの、あの「知的機構」を欠落しているということにあるのです。この点で、無教養な専門主義者と博識なディレッタントとは同じ穴のむじなといえるでしょう。

さて、博学多識であること、人類の當為に不可欠なあらゆる重要領域・重要問題に関心と知見をもつこと、自分がどの領域の専門家であれ、政治、経済、科学、芸術、道徳など万般の事柄を視野の中に入れ、それらが内面に交響しあっていることは、教養の必須の要件です。しかし教養の最も本質的な契機は、それらの関心や知見をまさに教養たらしめているところのひとつの「知的機構」にほかなりませんでした。

最後にこの「知的機構」の性格を簡単に要約することにしましょう。それは第一に、譬喩的に云えば、自分の専門を含む諸領域についての関心や知見を下

位のサブ・システムとするひとつの上位機構、乃至制御サブ・システムと見なすことができます。ここでこの制御サブ・システムは、下位のサブ・システムに批判的に関与し、それらをおある意義のもとに組織化するとともに、問題や課題に応じて自由に変換し翻訳する機能を営まなければなりません。第二に、この知的機構に固有のこうした批判や意義はどこに根拠をもつかといえば、それはまさに人類の価値実現という普遍的で窮極的な目標にほかなりません。この目標と批判的に関係づけられることによって、個々の知見はヒューマナイズされた見識へと昂揚することができます。第三に、それは各人の関心や知見を、他の人びとの関心や知見と批判的に関係づけ、交通させる能力として、人びとの間での「教養ある対話」を可能にし、人びとをしてこのような対話を成立をさせる社会的な「場」の形成に参加させます。第四に、この知的機構の機能は、個々の学識や文化的素養を、人間の歴史的課題を先端とする一定の意味連関に組織し、同時にまたそれらをこの意味連関のなかで絶えず課題化していくことにあります。

以上の諸点はそれぞれ一層詳密な検討を要すると思いますが、すでに時間の余裕がなくなりましたので、それはまた別の機会に譲ることに致しましょう。最後の論議は大部『ガリレイの生涯』から離れたように見えますが、しかしそれがこの作品の示唆によって展開されたものであることは、今日の講演の全体を想起していただければ充分了解されることと思います。これからもう一度ブレヒトの作品を読み返し、「教養の問題」についての認識を深めていただければ幸いです。